
My Sweet Sanctuary

若宮櫻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Sweet Sanctuary

【Nコード】

N0673H

【作者名】

若宮櫻

【あらすじ】

俺、三崎景護は恋をしている。過去形ではなく、現在進行形で。相手は高校時代の同級生で、一目ぼれだった。しかし、その相手とは29歳になった今も、友情が続いている。告白を——すれば良かったのかもしれない。けれど、その勇気が俺には無かった。なぜなら、その相手とは俺と同じ『男』だったから・・・。

俺、三崎景護は恋をしている。過去形ではなく、現在進行形で。相手は高校時代の同級生で、一目ぼれだった。

しかし、その相手とは29歳になった今も、友情が続いている。告白を——すれば良かったのかもしれない。けれど、その勇気が俺には無かった。

なぜなら、その相手とは俺と同じ『男』だったから……。

俺が、女の子相手に友情を抱く事は出来ても、恋愛感情が芽生える事は無いと、自分の性癖に気が付いて……周りと違う事に気が付いて、初めて好きになった人。

高校の3年間、同じクラスだった「香野綾人」は俺の鼻屑目を除いても、良い男だった。

勉強は一番。スポーツも一番。すらりと背が高く、黒々とした瞳と髪は、いつも俺の心拍数を上げていた。

話下手な所はあったが、優しい綾人は女子に人気があった。

綾人が誰かから告白されるたびに、俺は唇を噛んでいた事を覚えている。

告白されたからといって、綾人が女子生徒と付き合う事は無かったが、それでもあいつはノーマルで・俺は怖くて気持ちを言葉に出来なかった。

だからせめて、見つめて居たかった。

「好きだ」と言っ、今の関係を壊す位なら、傍で一番の親友で居たかった。

大学を選択する時も、少し難しいレベルの大学でも綾人と同じ大学に通いたくて、猛勉強をした。

大学を卒業した時は、流石に同じ会社には入れなかったが、そこそこ有名な会社に就職して、ちよくちよく酒を飲んでいた。

一番の親友で居た。頑張っ努力したおかげで、親友として想ってくれていると思っていた。

でもそれは、俺の間違いだったようだ・・・。

『 M Y S w e e t S a n c t u a r y 』

7月14日。

突然の出来事だった。まさか告白されるなんて思ってもみない。

俺はその日、綾人から大事な話があるからと頼まれ、次の日以降一週間の休みを取った。
仕事中に唐突に電話がかかって来て、休日はまだ先だぞ、と言って

もお構いなしで、時間を空けてくれたと頼まれたのだ。

大事な話と言っても、一週間となれば有休を使うしかない。

何故そんなに時間が必要なのかと不思議に思ったが、大事な話だからと繰り返されては断れなかった。

綾人と長い時間一緒に居られると云う意味だろうか。と、睨みつける上司の顔を無視して心を躍らせていた。

夜にお前のマンションに行くから、と綾人に言われ、会社の仕事を片付けると急いで帰宅した。

散らかしているわけではないが、部屋の中を掃除して、身支度まで整える。

我ながらまるで高校生の様だと思うが、気になって何度も鏡を見てしまう。

生まれつき色の薄い茶髪は、この前切ったばかりだから大丈夫。服はあまり気取ってもおかしいから、普通に家にいる時の物。

前髪をいじりながら鏡に顔を近づけた。女性的な俺の顔が映る。

背は当たり前の男位に伸びたが、横幅が無く全体的に華奢な俺は、男性的な綾人にいつも憧れていた。

初めて出逢ったあの時から、ずっと。

「綾人・・・」

呟いた瞬間、部屋のチャイムが鳴った。

タイミングが良過ぎて驚いたが、深呼吸をして落ち着ける。

鏡を見て、友人らしい笑顔を浮かべられている事を確認した後、玄関へ向かった。

扉を開けると、少し久しぶりに会う綾人は、一人の少年を連れていた。

「よお、こんばんは」

綾人が軽く手を上げる。黒髪がさらりと揺れ、屈託の無い笑顔の綾人にドキツとした。

顔に血が上りそうになるのを、抑えながら部屋へ入れる。

「いらつしやい、入れよ」

少々大荷物なのが気になった。今夜は泊まる気らしい。

荷物を運ぶのを手伝いながら、リビングへ。

双方の仕事が忙しく、最近はなかなか会えないでいたが、やっと向き合つと、綾人は変わらずに元気そうに見えた。

そして綾人の傍らの少年。

その時、初めて俺は綾人の弟に会った。

顔を見るのは初めてだが、綾人から話は聞いていた。紹介されなくても、これだけ似ていれば気が付く。

兄の男らしい体と違って、まだ細い少年の体つき。童顔で中学生に間違えそうなくらいだ。

それでも兄弟の黒い瞳と髪は同じように光りを返して、そっくりだった。

一応綾人が、弟の紘だ、と紹介してくれる。

紹介されるのが恥ずかしかったのか、紘くんは顔を隠してしまった。年の離れた紘くんは17歳。綾人が大学を卒業した年に両親が事故で亡くなって、それ以来、綾人が育ててきた子だ。

兄にしがみつく様にして俺の前で挨拶をした。綾人に促がされながら、それも微かに聞き取れる位の小さな声で。

「・・・こんばんは・・・」

大人しい子で、理由あって高校に通ってないという事は聞いているが、普通の男子高校生の年代の子の雰囲気ではなかったから少々面食らった。

おどおどと、落ち着かない様子で、頼りなさ気に兄を見ている。顔以上にその動作が、紘クンを幼く見せていた。

「こんばんは。俺は夕食これからなんだけど、食べる？」

俺が笑顔で話しかけると紘クンは、一度兄を見上げ、綾人が頷くのを見てから自分も小さく頷いた。

「簡単なものだけど良い？」

腕をまくりキッチンに入りながら言った。

二人の荷物を客間に置いた。

客間はベッドが一つしかないがそこそこ広いので、兄弟なら二人でも寝れるだろうと思ったからだ。

「何でも良いよ」

綾人は手伝う気が全く無いようで、対面式キッチンの外側から椅子に座ってこつちを見て言った。

紘クンは手伝おうか迷っているようで、綾人と俺を交互に見ていた。座ってて良いよ。と俺が言くと、おずおずと綾人の隣に、ピッタリとくっつく様にして座った。

そして俺は用意に取り掛かる。

三人での食事中、俺は何度も話しかけたが、紘クンと会話が成立する事はなかった。

綾人が何かを言っても頷くだけだった。

それでもデザートに甘いものを出すと、少し表情が変わって、笑っていると言えるほどではなかったが、俺には少し喜んでいるように見えた。それが嬉しかった。

紘クンは不思議な子で、今日初めて会ったはずなのに、可愛くて仕方が無い。

可愛い、純粹な紘クン。

食事の後、眠たそうに目を擦りはじめた紘クンを、綾人はまるで幼い子どもをあやすかのように抱きしめ、耳元で何かを囁いてからリビングの隣りの客間へと連れて行った。

その間に食器を片付けていると、終わった頃に綾人は戻ってきて「人見知りなんだ」と苦笑していた。

人見知りと言う以上に人が苦手なように見えたが、それでも俺の中で紘クンは好印象だ

「傍にくっ付いてて可愛いな。『お兄ちゃんが大好き！』って感じに見えたぞお」

素直に思った事を笑ってからかう風に言うと、少し照れたように綾人が返した。

「紘は昔からお兄ちゃん子だったからな、10歳からは俺が育てたようなもんだし。でも、ああいう風に甘えてくれるようになったのは、最近なんだ。俺も仕事が忙しくて、かまってやれなくて・・・」

最後の方へ行くにつれて声が低くなるのを感じ、暗い空気を消したくて明るく取り繕った。

「最近、お前本当に忙しかったよな！　いつ連絡しても用事があるって、彼女でも出来たのかと思っただぞ・・・！」

「ああ・・・、ちよつとやらなきやいけない事が出来てな。仕事ばつかしてるのに、彼女なんて出来るかよ」

その時、笑顔になった綾人に安心するとともに、彼女が居ないという言葉にも安心していた。

しかし仕事ばかりしていると聞けば、心配にもなる。少しやつれた様にも見えた。

「仕事ばかりしてると、いつか体壊すぞ。大丈夫か？　働き詰めで」

「・・・大丈夫だよ。そんなにやわには出来てないからな」

綾人はそう言っただけで俺の心配を消すかのように笑った。

「なら一週間の休みなんて良く取れたな。仕事詰まってたんじゃないのか？」

俺でさえ上司に文句を言われながら休みを取ったのだ。

「・・・まあ、休み分位は働いてるからな。上司も少し心配してたから『少しは休め』って言われた」

「よし！　じゃあ、たくさん働くお前には、元気になる水をやろう！」

キッチンの戸棚から、箱に入ってたビンと二つのグラスを出してリビングへと持っていった。

店で見つけてから、綾人と飲もうと思って買った日本酒だ。

「元気になる水って・・・酒かよ」

少し呆れた様子の綾人だが、俺が日本酒の入ったグラスを渡すと嬉しそうに受け取った。

綾人と会って食事をしたりする時は大概、酒が入る。いつもの事なのだ。

客間も、実は酔いつぶれた綾人や友人達を、休ませたり泊まらせたりする為に使っている。

だからベッド置き、小奇麗にはしておくのだ。今夜は絃クンがすやすやと眠っているが。

「これな、結構良い所のヤツなんだぞー！」

高かったんだからな。と呟きながら、二人でグラスを鳴らせた。

一口飲むと、口の中にほのかな甘みが広がった。

何かを考え込んでいるのか、綾人は飲まずに、グラスの中で酒を転がしている。

いつも言いたい事は言う綾人にしてみると珍しい。俺も不思議に思っている、ふと思いついた。

今回、一週間も休みを取らされた理由を、まだ聞いていなかった。

「で？ 話って、絃クンの事か？ 連れてくる位だし・・・もしかして、仕事が忙しいからって預かれて話か！？ お前どれだけ仕事してるんだよ・・・別に、俺は良いけど・・・」

「いや、そうじゃないんだ。実は・・・」

問いかけに答えようとしたが一度言葉を区切り、綾人は一度うつむき、息を吸い込んでから意を決したように俺を見た。

長い付き合いの中で初めて見る真摯な瞳に、頬が熱くなるのを感じた。これはきつと酒のせいではない。
綾人の形良い唇が動き出して、目が吸い寄せられる。

「大事な話は・・・、お前の事が好きだって話」

「……………え？」

その瞬間は、何を言われているのか分からなかった。
言葉を理解出来ず、思考が停止する。

向かい合わせに座っていた綾人が立ち上がり、俺の傍らに座る。
ギシツという音で、少し現実を引き戻されるが、まだ状況が良く分かっていなかった。

スツと腕が伸びてきて、抱きしめられて、分けも分からず少し上にある綾人の顔を呆然と見つめていた。

唇に降りてきたのは唇。驚いたまま、自然とまぶたを閉じた。

はつきりと覚えているのはここまで。

01（後書き）

サイトにも遊びに来ていただけると嬉しいです。

<http://sweetty.jp/offlimits/>

意識と体が熱に浮かされた後、気が付いた所はリビングを挟んで客間の反対側にある寢室の、俺のベッドの中だった。

汗ばんだ綾人の腕で抱きしめられるのが心地よかった。

抱き合っている間、ずっと綾人は『愛している』と囁いてくれた。

そのせいか体の高ぶりは収まっても、なかなか心の高ぶりは収まっていなかった。

「——ずっと、ずっと俺は綾人が好きだった！・・・気づいてたのか？」

綾人の胸に顔を埋めながら、吐き出すように言う。

意識がハッキリしてから、怖くて綾人の顔が見れない。

長く想い続けたせいだろうか。これが嘘なんじゃないか、夢なんじゃないかと疑ってしまう。

「何となく。高校の時は友達だと思っていた。ただ、いつの間に

かお前に見つめられるのを意識するようになって、傍に居てくれるのが心地よくなって・・・」

その時俺は、自分の瞳が潤んでいる事に気づいていなかった。

「ごめんな。気持ちを決めるのにこんなに時間がかかって・・・」

頬を流れる涙に気付き、顔を持ち上げると綾人は優しく拭ってくれた。

優し過ぎるから、これが真実なんだと感じられる。

叶わぬ想いだと思っていたから、相手の気持ちが返ってくるのが嬉しくて、声にすることができなくて、綾人の謝罪に俺は、首を振るしか出来なかった。

涙を流しながらも、嬉し泣きなら笑顔になる事も簡単だ。

笑顔で綾人に口付けると、力の増した腕に更に涙が流れた。

弟の紘クンの話を聞いたのも、同じベッドの中。

やっと涙が収まった頃、なぜ紘クンが一緒なのか、と俺が聞いたからだった。

「景護への俺の気持ちを紘に話すつもりだったし、紘の事もお前に話すつもりで連れてきたんだ。それに紘は・・・紘は俺が居ないと眠れない」

「眠れない・・・って？」

「俺はあいつを守りたい。それを、頼めるならお前にも手伝って欲しいんだ。これから話す事は事実だが、他人や本人に話すと紘を傷付ける事になるかもしれない・・・。無闇に話さないでくれるか？」

「それはもちろん！ 綾人の弟なら、俺も何かしたい。秘密なら守るよ」

本心だ。

こののち綾人と生きていくなら、そのたった一人の肉親である絃クンとは、仲良くしていきたい。

そういう事を抜きにしても、絃クンは可愛くて、あの少年の良い友人になりたいと思う。

「・・・ありがとな」

優しく微笑んで綾人は言った。

さっきまでは男の顔をしていたのに、今は兄の顔をして、雰囲気もまるで変わっている。

俺も微笑み返すと、ゆっくりと綾人は語りだした。

「—— 絃は・・・一人で眠る事を怖がるんだ。眠る時に一緒に居てやらないと、嫌な夢を見るらしい」

その言葉には少し驚いた。

確かに絃クンは童顔で、兄にしがみ付く姿は幼く見えたが、それでも17歳の男だろう。

思った事が顔に出てしまったらしく、綾人が物悲しい顔をした。

「元々人見知りの所はあったけど、明るい子だったんだ。俺の後をちょこまかと追いかけて・・・でも、父さんと母さんは・・・教育熱心な人だったから。俺にもだけど、絃にも厳しかったんだ」

綾人の両親の事は知っている。

父親と母親両方とも名門大学を出て、父親は会社を興し、母親は大

学で教鞭を取っていた。

自分達のように、自分達以上にと期待がかかったのか、勉強や躰けに関してはとても厳しかったと聞いている。

高校大学時代は、よく綾人のこぼす愚痴を聞いていた。

「俺はお前が話を聞いてくれてたから、なんとか我慢してたんだ。けど・・紘は父さんも母さんも大好きだったからな・・。悪口なんて以ての外だったみたいだし、吐き出す相手も居なかったんだ」
「・・・・」

「小学校でも虐められてたみたいで、それが両親が死んだ時にエスカレートしはじめて、中学に入った時にとうとう紘の心が壊れた」

ゆつくりと言葉を探しながら、確かめながら弟の事を語る。

綾人の辛そうな表情を見て、話を聞いて、涙が出たのは悲しかったから。

切なかったから。

「虐められるのは自分が悪いからだ、って思ってたらしい。そんな事、親にも言えないし、俺にも言えない。言ったら嫌われると思っただって・・。最近になって話してくれた」

綾人の瞳には涙の膜が張っている。

思わず、手をギュツと握んだ。

「全部自分の中に溜め込んで・・。そんなの、・・・・殺されかけるまで黙って無くても良いのに!!」

綾人がキツク瞳を閉じると、涙が零れた。

俺は初めて聞く衝撃的な話を受け入れるだけで精一杯で、その涙を拭う以外に何も出来なかった。

「同じクラスの男子生徒たちに乱暴されて、それに女子生徒たちも面白がつて協力して、教師までも加担してたらしい。傷だらけの紘を見るまで俺は・・・気づいてやれなかった・・・！」

「綾人・・・！」

涙に喉が震えながら、名前を呼んで抱きしめた。

これは・・・弟の苦しみに気付いてやれなかった兄の懺悔。

でも悪いのは、紘くんじゃない、綾人じゃない。

気持ちを分かってくれたのか、頭を優しく撫でてくれた。

「その頃は俺でさえ触れる事ができなかったんだ。でも、少しずつ慣れてきた。まだ、他の人間は難しいし、学校にも行けないけど、少しずつで良いから、笑顔になつて欲しいんだ」

「・・・俺も、俺も手伝うよ。今日会ったばかりだけど、あの子の事が大好きになったから・・・！」

嘘じゃない。偽善でもない。同情でもない。

本当にそう思った。

幸せになつて欲しい。その権利が彼にはあるだろう。

辛い過去を忘れられるくらいに、辛い過去を笑い話に出来るくらいに。

「・・・この話、初めて人にしたんだ。景護には知っていて欲しかったから」

「ありがとう、話してくれて・・・」

その時俺は、紘クンを真ん中にして三人で暮らす事を思った。

三人で家族になれば。幸せになれば。

今はまだ、ぎこちないかもしれないけれど、いつか何の躊躇いも無くなったら俺から言おう。

家族になろう、と。

そう思った。そう夢見たんだ。

朝、少し所ではなく心臓が跳ねながら、紘クンに俺たちの事を話した。

すると、特に抵抗は無いのか、「そう・・・」とだけ言った。

あまりにサラッと受け入れるので、冗談と思われているかと心配したが、綾人は平気そうにしている。

「あの、でも・・・本当に大丈夫・・・？　俺が君のお兄さんと、その・・・」

「・・・恋人、でも？」

首を傾げる紘クンは、不思議そうにしている。

何故そんな事を聞くの？　と言われているようだ。

そんな表情に戸惑っていると、彼が答えをくれた。

「僕は・・・兄さんが良いなら・・・良い」

兄弟仲が良いのは筋金入りか。

ちよつと拍子抜けしてしまつたが、許してもらえらならそれに越した事はない。

「じゃあ、そういう事で・・・そろそろメシにしない？」

唐突に言つたのは綾人だ。

空気をガラリと変えるその言葉に、思わず俺は噴き出した。絃クンも表情からは分り辛いが、笑っている様に見える。

綾人も加わり、三人でひとしきり笑つてから、俺は朝食の準備に取り掛かった。

一週間、三人で暮らそう。

そう朝食の席で提案したのは、綾人だつた。

理由は、「絃と景護が仲良くなれるように慣れてほしいから」との事。

長い休みを取つたのも、その為らしい。

大きな荷物を持ってきたのも、最初からそのつもりだったからだ。

（俺が断つたら、コイツどうするつもりだったんだろう？）

なんて心の中で呟いてみる。

しかし、結局俺は綾人にベタ惚れなのだから、そんな疑問に意味は無い。

目下の課題は、絃クンと仲良くなる事だ。

綾人と俺の関係は、元友人の現恋人。

綾人と絃クンの関係は、仲の良い兄弟。

なら、俺と絃クンの関係は・・・？

それを築きたい。

良いカタチで。

綾人の提案にはもちろん賛成だ。

「絃クンは、この部屋で生活するのも良い？」

強制的にならないように、出来るだけ優しい声を意識して問う。

絃クンは少し視線を迷わせた後、頷いた。

彼は、兄の提案なら何でも受け入れそうだから・・・出来ればこの部屋を、絃クンにとって心地よい場所にしたい。

「決定だな。って、絃お、ちゃんと食べなきゃ駄目だぞ」

「・・・うん」

会話の合間でも、綾人は絃クンの世話を焼く。

少食な弟の為に、皿におかずを乗せているその姿は、まるで雛鳥にエサを運ぶ親鳥の様だ。

「ぷ・・・お前、お母さんみたいだな・・・」

あまりに微笑ましくて、ついつい笑ってしまう。
照れながらも親鳥が反論する。

「それなら、景護の方がお母さんだろう。家事は得意で、料理もこんなに美味しい」

「一人暮らしが長いからな。必然的に、だよ」

俺の一人暮らしは、大学に入ってからだからもう10年になる。

別に家事は嫌いでもないし、やり始めると熱中してしまう性格のせいか、そこら辺の女性より料理が上手い自信がある。

けど、母親と暮らしていないという意味では、香野家も一緒だろう。

「外食ばかりってわけにもいかないし、家ならお前だってやるんだろ？」

「いや、料理は完全に、範疇外だ」

「・・・え！？ お前、器用なのに・・・」

長い付き合いだったのに、全く知らなかった。

本当に綾人は器用で、初めての事でも何でもそつなくこなすのに・・・。

「器用だからって、出来ない事はある。俺に出来るのは、片付け位だ」

苦笑する綾人。

紘くんもどこか苦い顔をしている。

料理がからつきと言うのは、本当らしい。

長く友人をしていますが、知らない事はまだまだあるのだ。

これから、知っていただけたら良い。
綾人の事も、あと・・・紘クンの事も。

片付けは出来る、と言った言葉確かめるために、朝食の片付けは綾人に頼んだ。
紘クンも手伝ってくれたけれど、言葉は真実で、手際良く食器は片付けていった。

ただ見ているのも楽しいのだが、手が暇なうちに家事を終わらせようと、俺は洗濯機を回し始める。
丁度止まったのが食器も片付いた頃で、三人でベランダに洋服などを干す。

今日はとても良い天気で、風に踊る洗濯物が、青空に映えて綺麗だ。

「ホント・・・何処かへ出かけたい位、良い天気だな」

初夏の風は心地良い。

目線の端に、緑が見えた。このマンションの近くにある、公園だ。

「ねえ、あそこまで、散歩に行かない？　綺麗な植物園があるんだ」

公園に隣接されているその植物園を指差しながら、綾人と紘クンに振り返る。

すると似た顔で二人、ぎこちない笑みを浮かべた。

どうする？　と、兄は弟を窺い見る。

問われた絃クンは、戸惑っている様子だ。

「ぎこちない笑みの理由は、絃クンだ。俺に会う時だって、あんなにも緊張していたから、外というか・・・他人がいる場所が苦手らしい。」

絃クンに無理をさせたくはないが、折角だからと思い、フオローを入れる。

「今日は平日だから、誰も居ないと思うよ。子どもとかそのお母さんは、遊具のある方へ行くから」

一応公園の敷地内にあるのだが、植物園はそこだけ雰囲気の違い、静かだ。

綺麗に管理されていても管理人はあまり姿を見せず、無料で開放されている。

そこまで言っと、安心したのか絃クンも頷いた。

戸締りだけをして、何も持たず部屋を出る。

綾人は絃クンと手を繋ぎ、絃クンは俺と手を繋ぐ。

男三人が手を繋いで並んで歩く姿は、傍目には一種異様に見えたかもしれないが、商店街など人や車通りの多い道を避けて通った為、特に人の目に晒されず、植物園まで着く事が出来た。

「・・・本当に綺麗だな」

着いて早々、綾人からの一言。

「……………」

無言だけど、紘クンも喜んでいいるらしい。
手を握る力が強くなった。

俺の言ったとおり、植物園に人影は無く、木々や花だけが風に揺れている。

この園で一番種類が多いのは薔薇で、薔薇園とも言われている。
その中の一つ、赤い薔薇が咲いているはずのアーチは、春咲きの為に葉に覆われてしまっていたが、大人の背丈程もある木々で作られた迷路には、初夏に咲く薔薇が咲き乱れていた。

「……………キレイ……………」

呟くと紘クンは、繋いだ手を放して一人先へ行く。

小さい花に顔を寄せて香りをかぐと、次へと駆け出して大輪の花に見惚れる。

横顔を見ると、きらきらと輝いていて楽しそうだ。

俺は、紘クンの表情を嬉しそうに眺める綾人の横顔を見ていた。

弟の笑顔を、心底嬉しそうに見ている。そんな綾人の笑みが、とても綺麗だと思った。

「ありがとう、景護」

弟を見ていた瞳が、ふいに俺に向く。

「……………大好きだ。お前を愛してる」

強く引き寄せられ抱きしめられると、紘クンの見ていない隙に触れるだけのキスをする。
唇が離れると、真っ直ぐ瞳を見つめた。

「俺も、綾人が大好き」

好きで、好きで・・・やっと叶った恋。

一週間は、本当に夢の様に過ぎた。
部屋で過ごすのも、何処かへ出かけるのも三人。

紘クンは俺に心を開いてくれた。

香野兄弟は相変わらず仲が良くて、兄は弟を猫可愛がりだし。

俺と綾人は夜、二人で紘クンを寝かせた後、毎晩のように体を重ねた。

みんな好き、みんな大切。
三人の、不思議なバランス。

楽しくて、嬉しくて、幸せな時間だった。

しかし夢の終わりは来るもので・・・。

7月22日。

それが、綾人の命日となった。

02（後書き）

サイトにも遊びに来ていただけると嬉しいです。

<http://sweetty.jp/offlimits/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0673h/>

My Sweet Sanctuary

2010年11月6日13時52分発行